

製造業の点検業務 実態調査

～「点検している」と「正しく判断できる」のあいだにあるギャップ～

studist

本レポートの目的

製造現場では今も、人命に関わる事故や設備の突発停止が起きています。2025年の製造業における労働災害の死亡者は115人でした（※）。人手不足が進むなか、異常の兆候を捉える点検の重要性は高まっていますが、点検を「実施している」ことと、正常・異常を「正しく判断できている」ことは同じではありません。本レポートは、点検の実施者と承認者300人への調査から、点検が事故や停止を防ぐ「予防」として機能しているかを明らかにします。

注釈：※厚生労働省「令和7年の労働災害発生状況」

本調査で明らかにしたかったこと：

- 点検に関わる人は、正常・異常を正しく理解できているのか
- なぜ、正常・異常が分かりにくいのか
- 点検の現場で、実施漏れ・報告の遅れ・形骸化は起きているのか
- 点検を「予防」に変えるために、現場は何を求めているのか



studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

調査概要

調査名	**製造業の点検業務に関する実態調査**
調査期間	**2026年10月9日～10日**
調査対象	**製造業・従業員300人以上の企業に勤める、 点検の実施者と承認者（n=300）**
対象者内訳	• **実施者｜若手・新人スタッフ（5年未満） 100人** • **実施者｜中堅・ベテランスタッフ（5年以上） 100人** • **承認者 100人** ※経験年数は実施者の点検経験。承認者には、承認のみを担当する人も含みます。
調査方法	**インターネット調査**

※各区分はn=100のため、区分間の小さな差は傾向としてご覧ください。
※割合は、各区分（n=100）は整数、全体（n=300など）は小数第1位まで表記しています。

studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

Chapter 01

点検の「正常・異常」を、現場は理解できているか



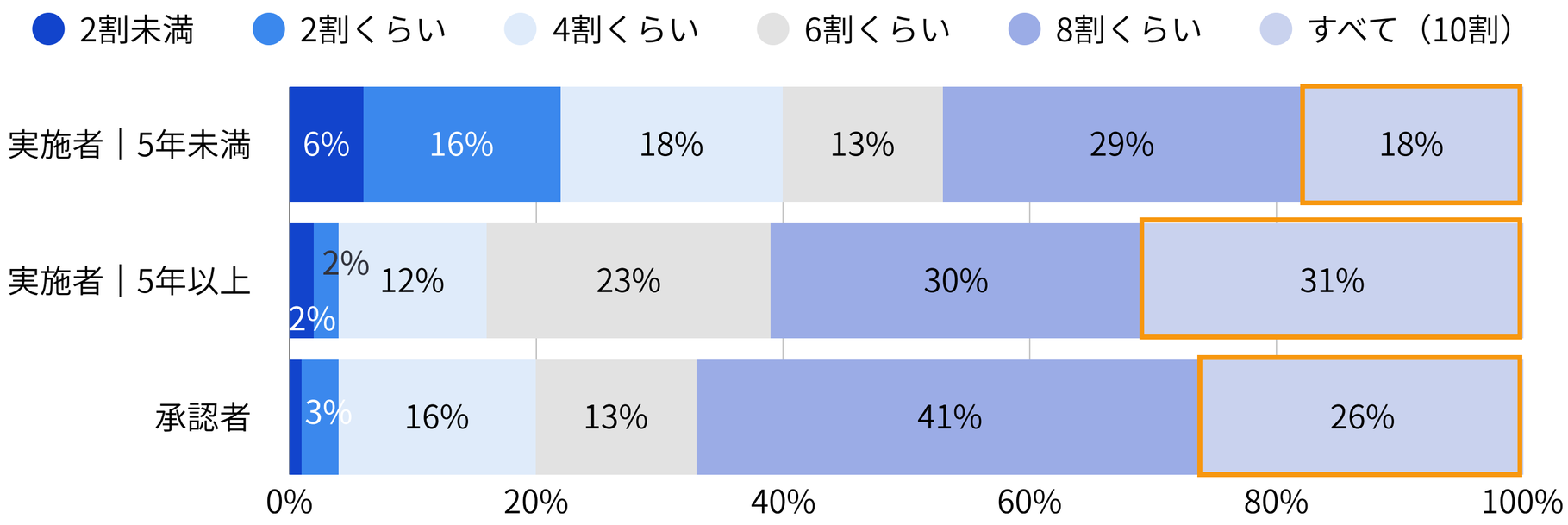
点検表の項目のうち、正常・異常を正しく理解している割合を、
実施者と承認者に尋ねました。
経験年数や立場による違いもあわせて見ていきます。

studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

5年以上のベテランでも69%が「正常・異常が分からない項目がある」

正常・異常を正しく理解している項目の割合を尋ねたところ、「すべて（10割）」は、5年以上の実施者で31%、5年未満の実施者で18%、承認者で26%でした。理解が「8割くらい」以下の合計は、5年以上の実施者で69%、5年未満で82%、承認者で74%で、経験を積んでも判断に迷う項目が残っている実態がうかがえます。

あなたが扱う点検表の項目のうち、正常・異常を正しく理解している項目は、全体の何割くらいですか（n=300）

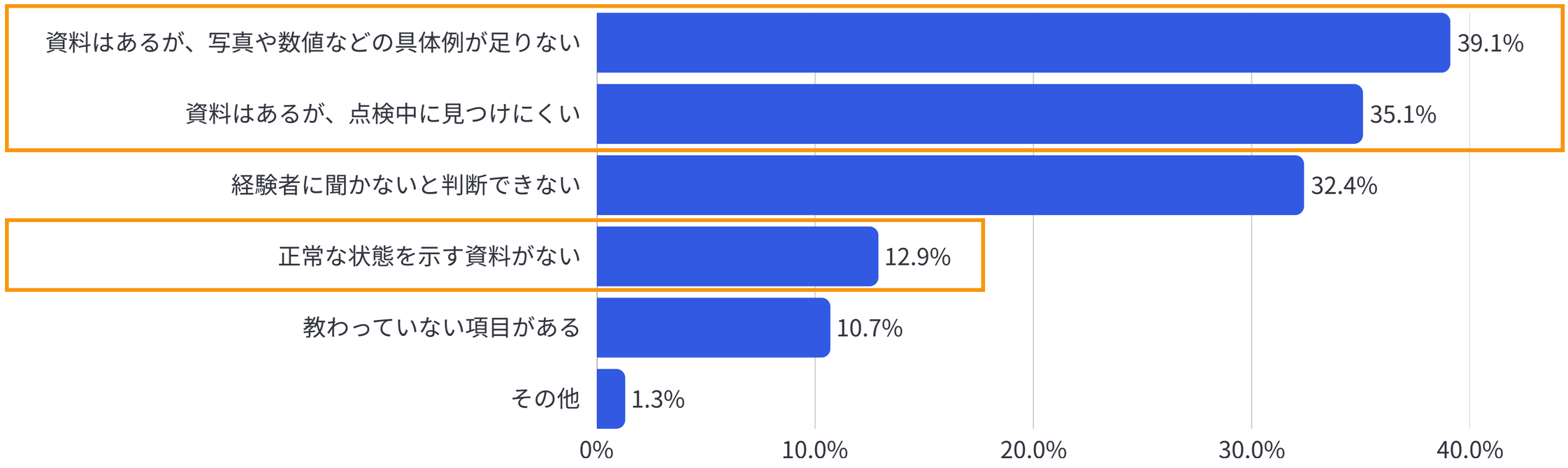


69%が「分からない項目がある」（5年以上の実施者）

studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

正常・異常が分かりにくいのは、資料はあるが足りず探しにくいから

正常・異常を理解している項目が「8割くらい」以下の人に理由を尋ねたところ、「資料はあるが写真や数値などの具体例が足りない」（39.1%）、「資料はあるが、点検中に見つけにくい」（35.1%）が上位でした。「正常な状態を示す資料がない」は12.9%でした。資料の有無より、現場で使える状態か、が課題であると推測されます。

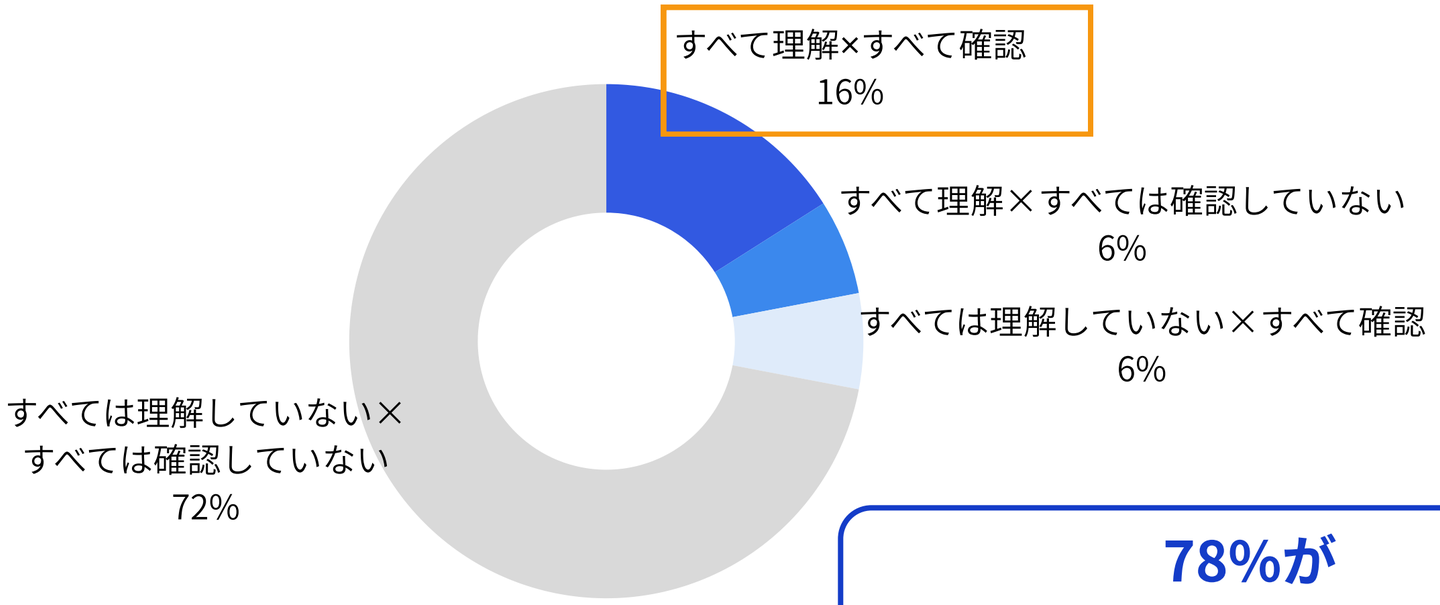


studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

承認項目を「すべて理解」し、結果を「すべて確認」する承認者は16%

承認を担当する点検について、点検項目を「すべて理解している」承認者は22%で、78%は理解していない項目があると回答しました。結果の確認状況と掛け合わせると、「すべて理解」かつ「すべて確認」は16%にとどまり、72%は理解も確認も「すべて」ではない状態で承認していることがうかがえます。

①あなたが承認を担当する点検について、点検項目（正常・異常の判断基準や内容）を正しく理解している項目は全体の何割程度ですか
②あなたが承認を担当する点検全体で、点検項目ごとの結果をどの程度確認していますか　（承認者 n=100）



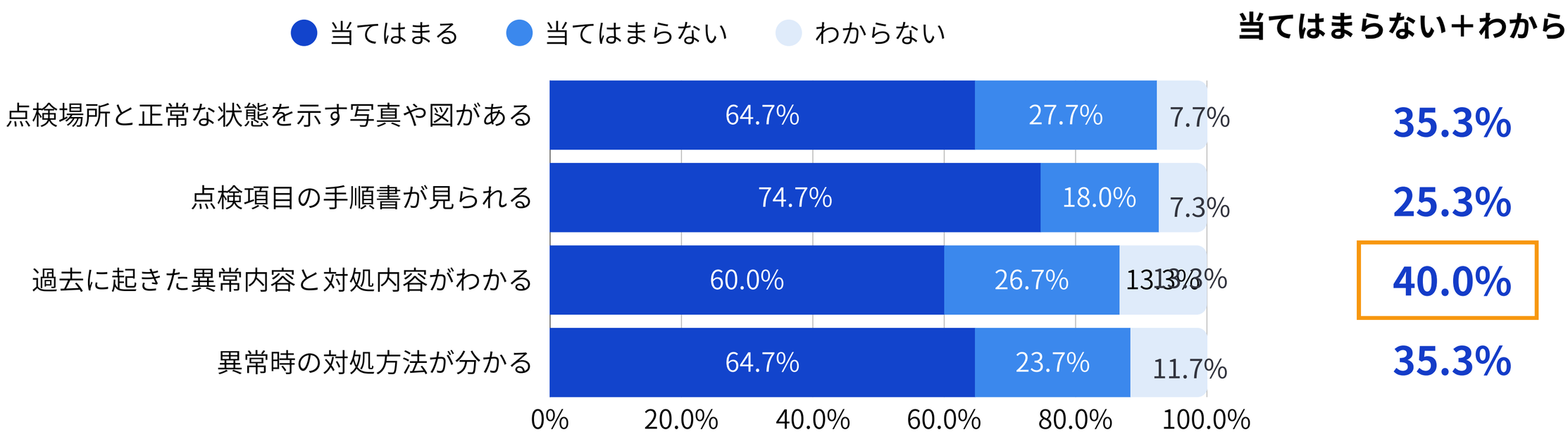
78%が
理解していない項目がある

studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

4割の人は、職場で過去の異常と対処内容が分かる状態にない

「過去に起きた異常内容と対処内容がわかる」に「当てはまらない」「わからない」と答えた人は40.0%で最多でした。「点検場所と正常な状態を示す写真や図がある」「異常時の対処方法が分かる」は各35.3%、「点検項目の手順書が見られる」は25.3%でした。過去の異常と対処内容は、職場で参照しにくい状態にあることがうかがえます。

あなたの職場の点検について、次の状態に当てはまりますか（n=300）



当てはまらない＋わからない

点検場所と正常な状態を示す写真や図がある	**35.3%**
点検項目の手順書が見られる	**25.3%**
過去に起きた異常内容と対処内容がわかる	**40.0%**
異常時の対処方法が分かる	**35.3%**

※四捨五入のため合計が合わない場合があります

studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

Chapter 02

点検対象の設備や作業で、何が起きているか



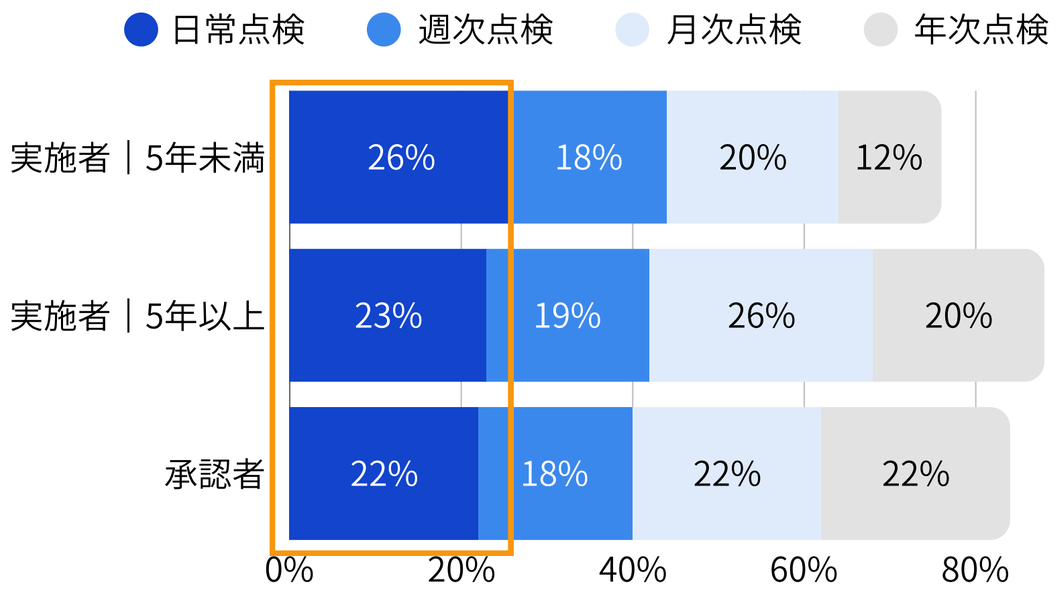
過去1年間の点検業務の課題と、点検の対象となる設備や
作業で起きたことを、実施者と承認者に尋ねました。

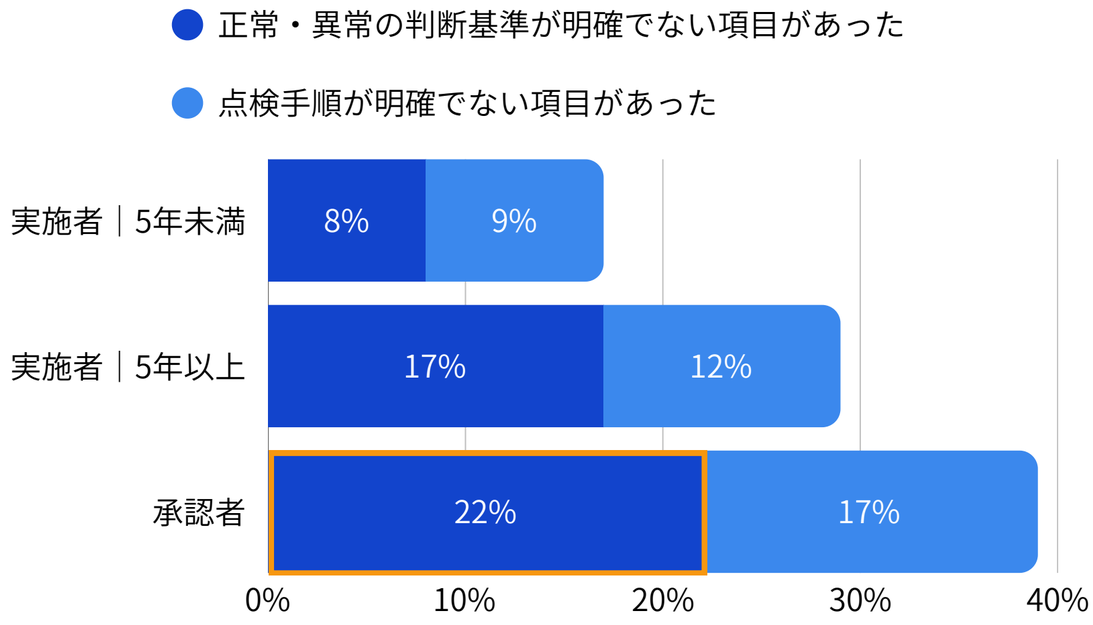
studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

日常点検の実施漏れは22～26%、判断基準が不明確な承認者は22%

「日常点検に実施漏れがあった」は、5年未満の実施者で26%、5年以上の実施者で23%、承認者で22%でした。週次・月次・年次を含め、いずれの周期・区分とも12～26%が実施漏れを挙げています。「正常・異常の判断基準が明確でない項目があった」は、承認者22%、5年以上の実施者17%、5年未満の実施者8%で、周期を問わず漏れが起き、基準の曖昧さは確認する側に多いことがうかがえます。

過去1年間、あなたの職場の点検で次の課題はありましたか。あてはまるものをすべて選んでください ※複数回答（n=300）
全11選択肢のうち、実施漏れ・判断基準・手順に関する6項目を掲載



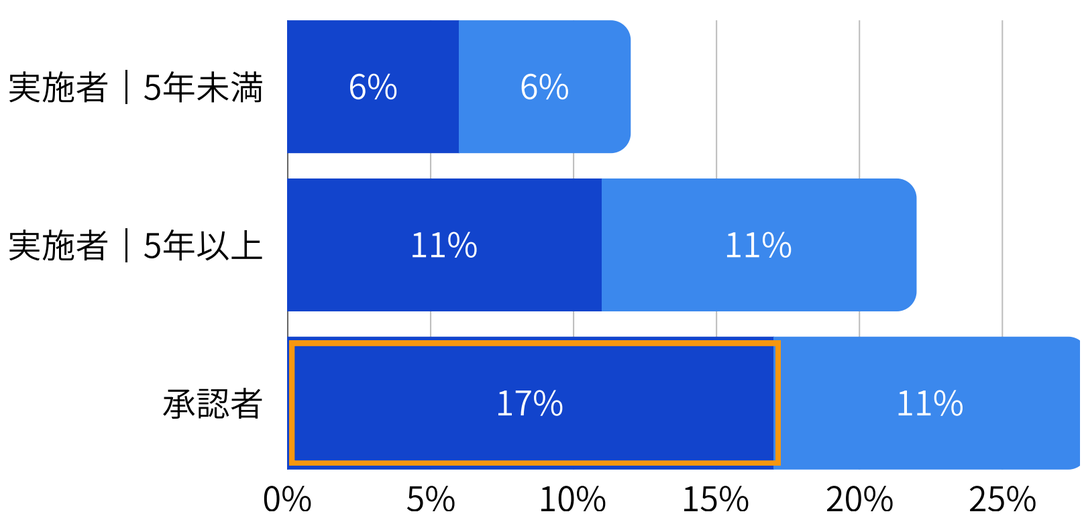


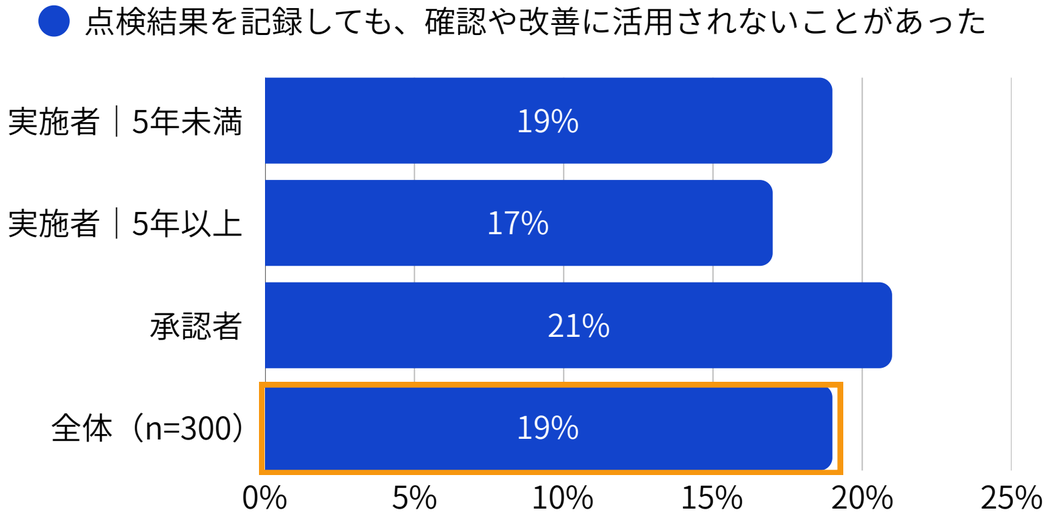
studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

異常の報告・共有の漏れや遅れは承認者の17%、記録の未活用は19%

「異常の報告や共有に漏れや遅れがあった」は承認者17%、5年以上の実施者11%、5年未満の実施者6%でした。「対応状況や完了を確認できないことがあった」は承認者と5年以上の実施者で各11%でした。「点検結果が確認や改善に活用されないことがあった」は全体で19%で、異常発見後の共有や完了確認にも課題があることがわかります。

過去1年間、あなたの職場の点検で次の課題はありましたか。あてはまるものをすべて選んでください ※複数回答（n=300）
全11選択肢のうち、報告・対応・記録の活用に関する3項目を掲載



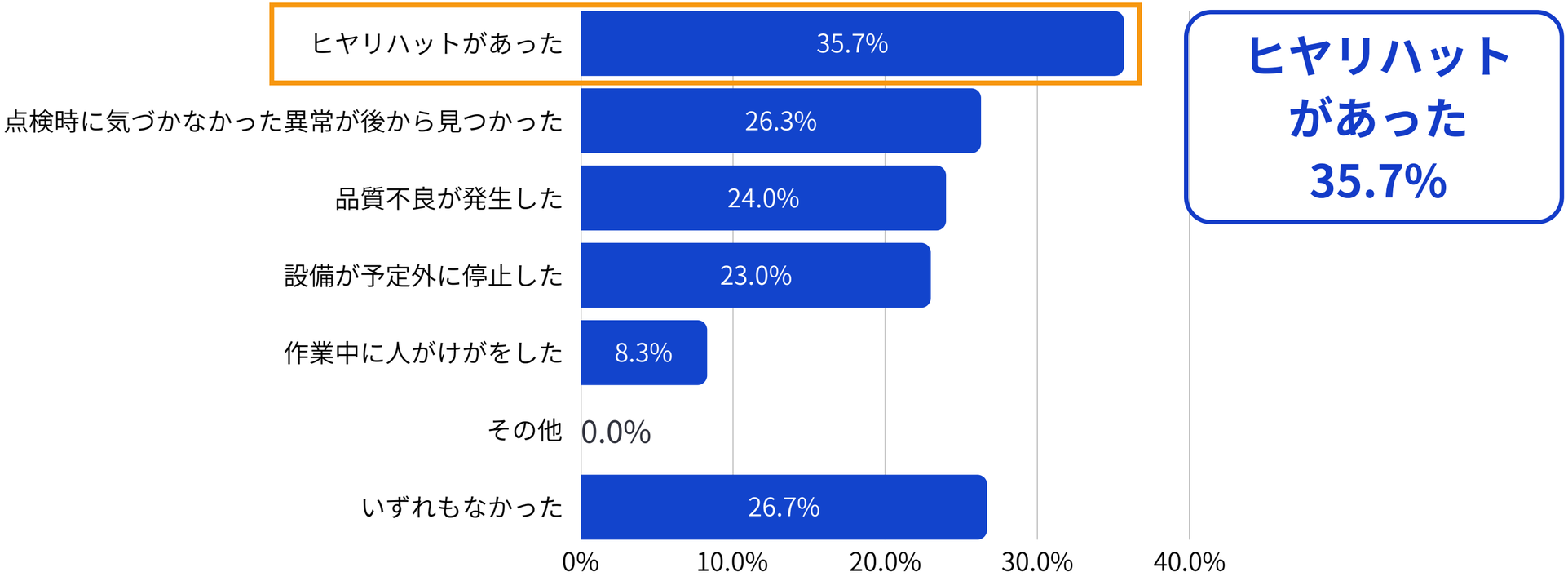


studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

点検対象の設備や作業で、ヒヤリハットがあったとの回答は35.7%

過去1年間、点検の対象となる設備や作業で起きたことは、「ヒヤリハットがあった」が35.7%で最多でした。「点検時に気づかなかった異常が後から見つかった」（26.3%）、「品質不良が発生した」（24.0%）、「設備が予定外に停止した」（23.0%）が続き、約7割（73.3%）が何らかの事象を経験しています。

過去1年間、あなたが関わる点検の対象となる設備や作業で、次のことはありましたか ※複数回答（n=300）



ヒヤリハットがあった 35.7%

手順の省略や異常の未報告を挙げる声も

「最も改善したい課題」について、改善のためにしていること、取り組めていないことを自由記述で尋ねました。
回答の一部を原文のまま紹介します。

「最も改善したい課題」で回答した課題に対して「改善のためにしていること」
「もしくは改善したいが取り組めていないこと・その理由」を具体的に教えてください

＜手順の省略＞

人によって手順を省略している人がいるので、
共通のやり方が
必要に感じる。
（5年以上の実施者）

＜異常の未報告＞

数値が規格外になっているのに報告がなくそのまま装置を動かしてしまった。

（5年以上の実施者）

＜記録の活用＞

記録を取るための点検になっており、異常を見つけ故障を予防する活動にまで繋げていくことが不十分
（承認者）

※最も改善したい課題を回答した人／自由記述から3件を原文引用（各1人の回答）

studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

Chapter 03

点検を「予防」に変えるために、現場が求めること



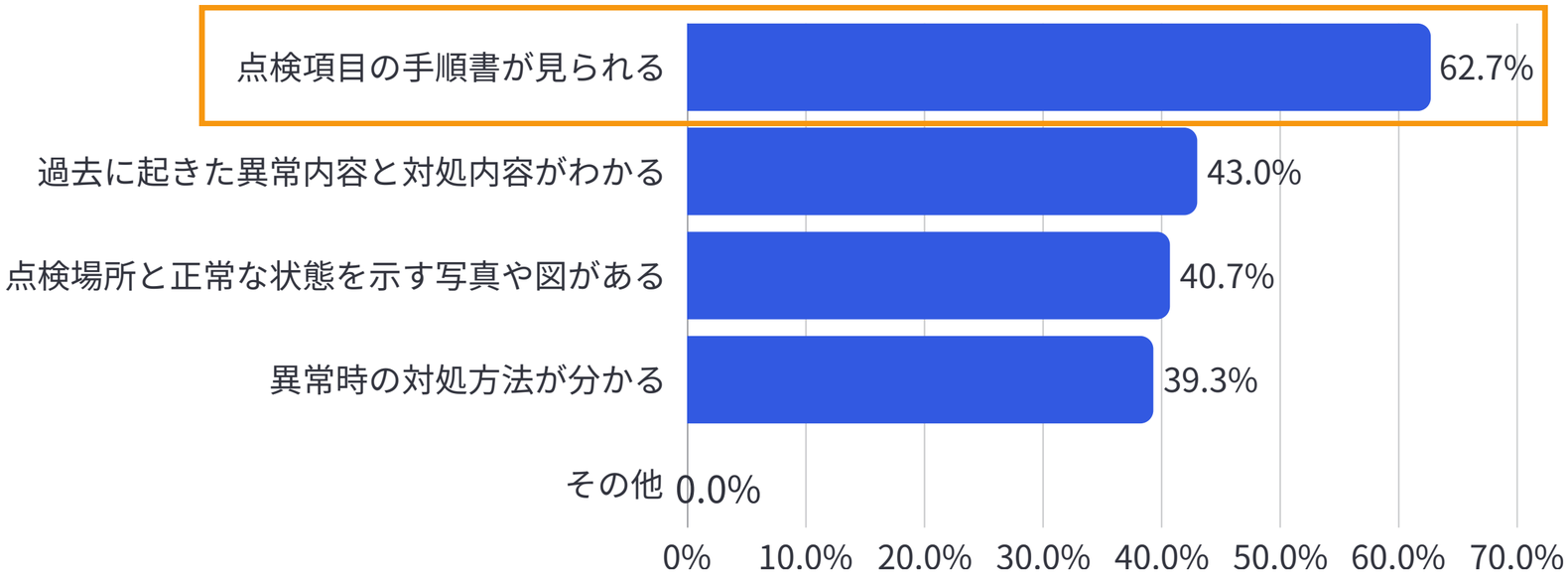
点検の標準化・属人化の解消に必要だと考えられている情報と、手順書や過去の対処方法を見られた場合への期待、最も改善したい課題を見ていきます。

studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

点検の判断や進め方を揃えるには、手順書が必要と答えた人は62.7%

標準化・属人化の解消に特に必要なものを尋ねたところ、「点検項目の手順書が見られる」ことが62.7%で最多でした。「過去に起きた異常内容と対処内容がわかる」（43.0%）、「点検場所と正常な状態を示す写真や図がある」（40.7%）、「異常時の対処方法が分かる」（39.3%）が続き、手順書を軸に具体的な情報も求められています。

点検表の項目の正常・異常を正しく理解し、点検業務の標準化・属人化の解消のために、特に必要だと思うものはどれですか。あてはまるものをすべて選んでください　※複数回答(n=300)



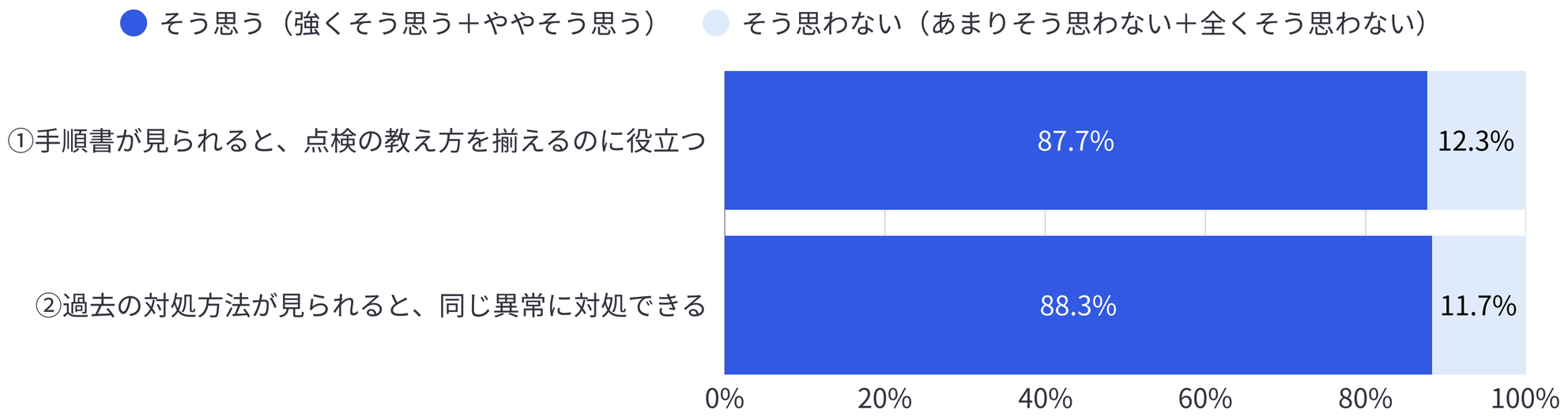
手順書が見られることが必要と答えた人は62.7%

studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

手順書や過去の対処方法が見られれば役立つと答えた人は約9割

点検項目の手順書を見ることができれば「職場で点検の教え方を揃えるのに役立つと思う」と答えた人は87.7%でした。過去の異常への対処方法をすぐ見られれば「同じ異常が起きた際に対処できると思う」は88.3%で、手順書や過去の対処を現場で参照できる状態への期待がうかがえます。

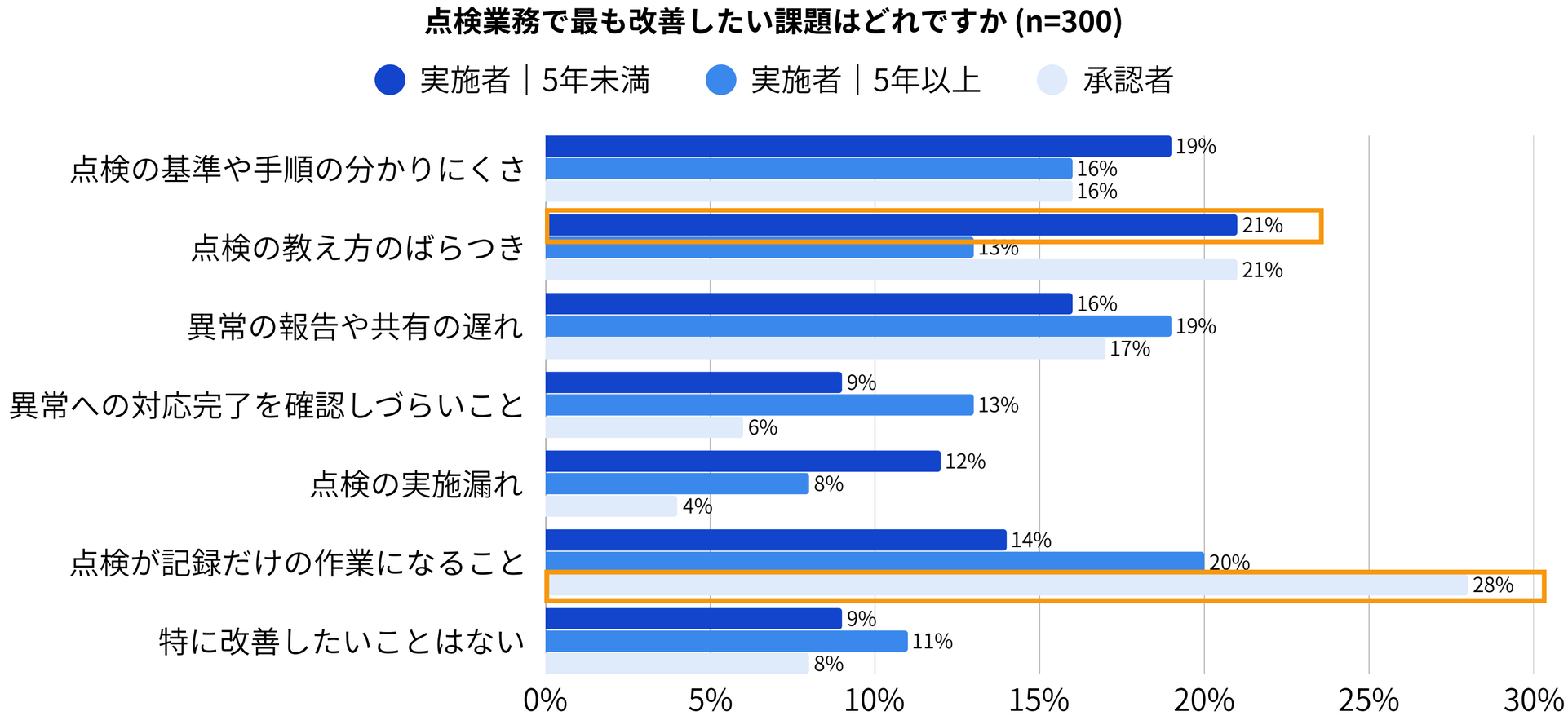
①点検項目の手順書を見られることは、職場で点検の教え方を揃えるのに役立つと思いますか
②過去の異常への対処方法をすぐ見られたら、同じ異常が起きた際に対処できると思いますか ※各・単一回答（n=300）



studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

点検の教え方や記録の活用に、改善を求める声

点検業務で最も改善したい課題を1つ選んでもらったところ、5年未満の実施者では「点検の教え方のばらつき」（21%）、5年以上の実施者では「点検が記録だけの作業になること」(20%)と「異常の報告や共有の遅れ」(19%)が上位でした。承認者でも「点検が記録だけの作業になること」が28%で最多でした。立場によって、改善したい課題に違いがみられます。



studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

Chapter 04

点検業務でのAI活用



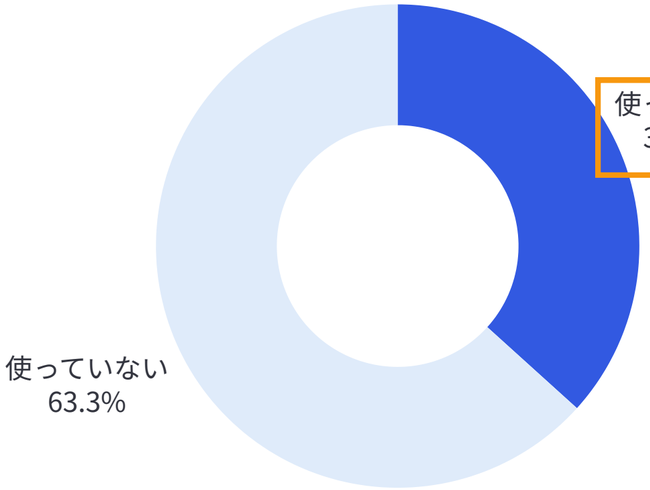
点検業務でAIがどの程度使われているか、
使っている人はどのような変化を感じているか。
今後どの場面でAIの支援を期待するかを紹介します。

studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

点検業務でAIを使っていない人は63.3%

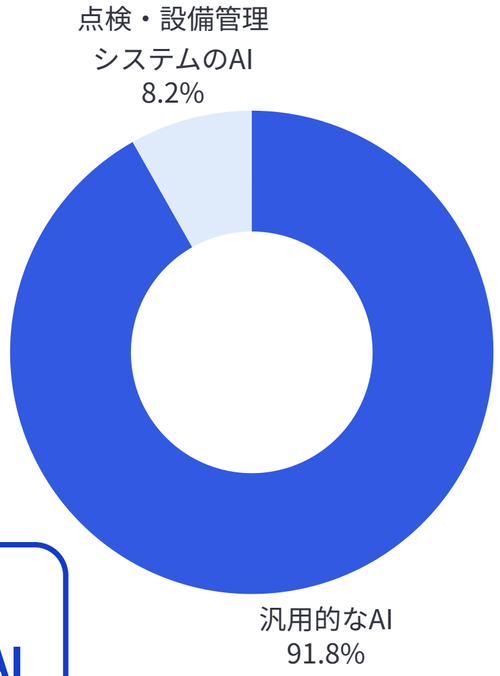
点検業務でAIを使っている人は36.7%、使っていない人は63.3%でした。
使っている人のAIは、91.8%が汎用的なAI、8.2%が点検・設備管理システムのAIで、点検に特化したAIの活用はまだ限られていることがうかがえます。

現在、点検業務で主に使っているAIがあれば教えてください（n=300）



使っている人は
どのようなAIを使っているのか？

AIを使っている人の内訳（n=110）



63.3%
AIを使っていない

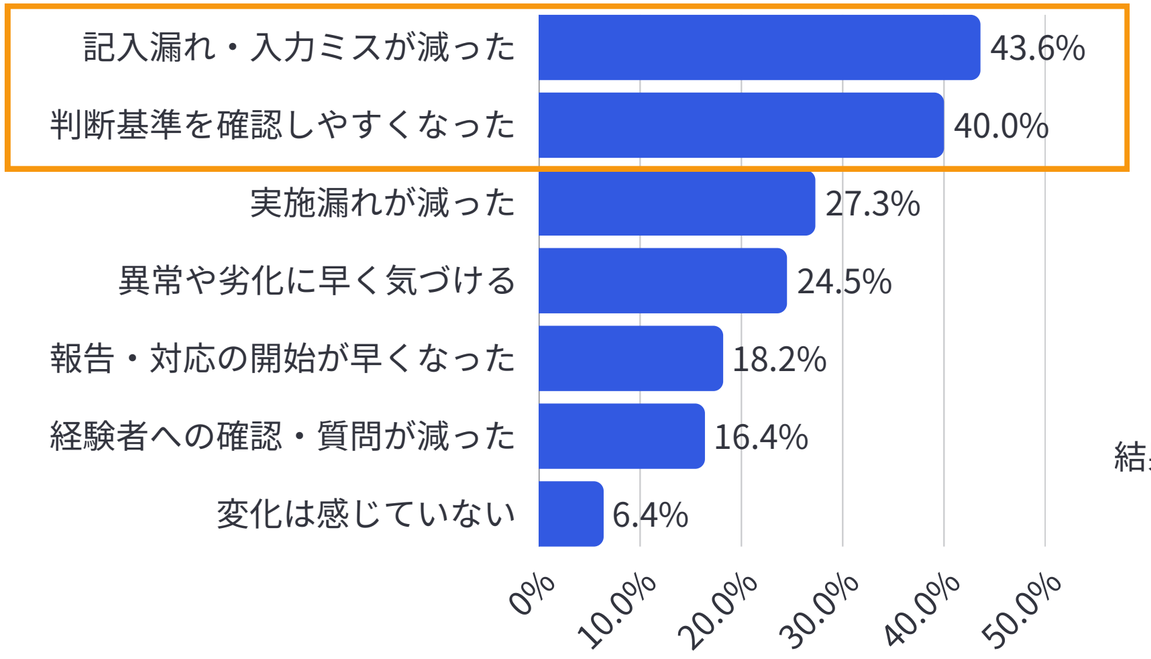
91.8%
汎用的なAI

studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

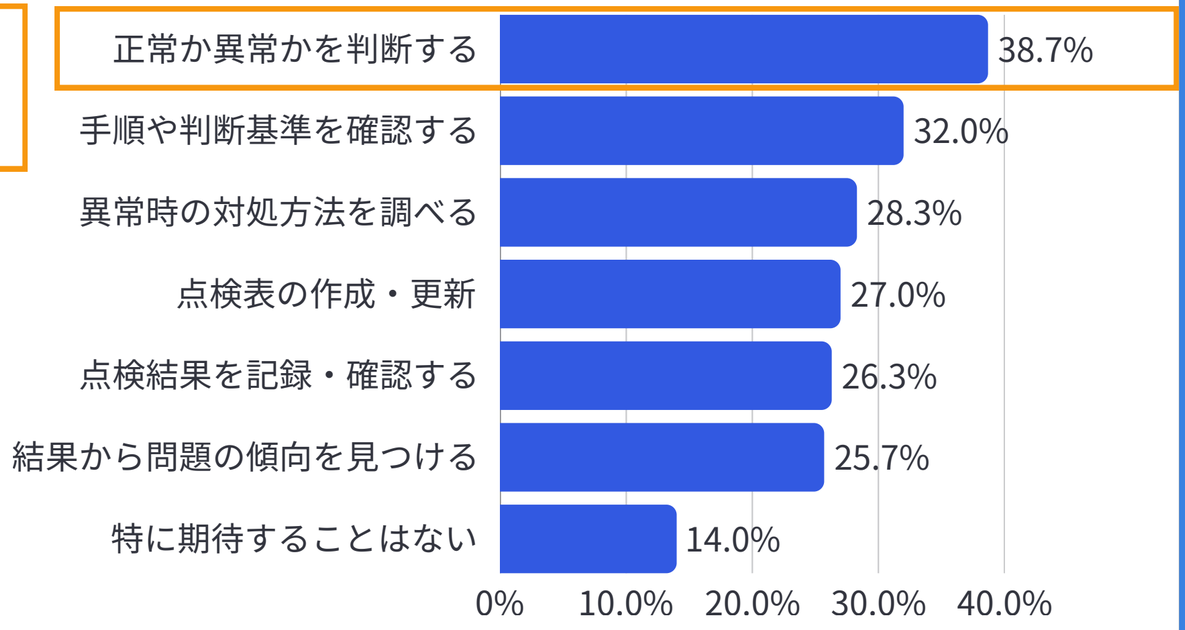
AIで経験者への確認が減った人はAI利用者の16.4%、異常の判断に期待

AIを使う人では、「記入漏れ・入力ミスが減った」（43.6%）、「判断基準を確認しやすくなった」（40.0%）が上位で、「経験者への確認・質問が減った」は16.4%でした。期待は「正常か異常かを判断する」が38.7%で最多で、現状の効果は記入・確認面が中心でも、判断の支援への期待が高いことがうかがえます。

点検業務でAIを使うようになってから、実感している変化はありますか ※複数回答（n=110）



今後、点検業務のどの場面でAIの支援を期待しますか ※複数回答（n=300）



studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.

「点検している」と「正しく判断できる」のあいだにあるギャップ

今回の調査から、点検を「実施している」「承認している」ことと、
正常・異常を「正しく判断できている」ことは別であることが分かりました。
5年以上の経験をもつ実施者の69%、承認者の78%が、
正常・異常が分からない項目があると回答しています。
その理由は資料の有無よりも、具体例が足りない、点検中に見つけにくいといった、
現場で使える状態になっていないことにあるとうかがえました。
過去の異常と対処内容が分かる状態にない人は40.0%でした。
また、過去1年間に点検対象の設備や作業で何らかの事象を経験した人は、73.3%でした（※）。
一方で、手順書や過去の対処方法をすぐ見られれば役立つと答えた人は約9割です。
点検を、チェック欄を埋める作業から、異常の兆候を捉え、対処を完了し、
次の予防につなげる仕組みへ。
その第一歩は、点検の標準化と属人化の解消ではないでしょうか。

※事象の経験（p.12）は、点検の実施状況や理解度との関係を集計したものではありません

studist © Studist Corporation. All Rights Reserved.